春日神社「大捷紀念神幟碑」について

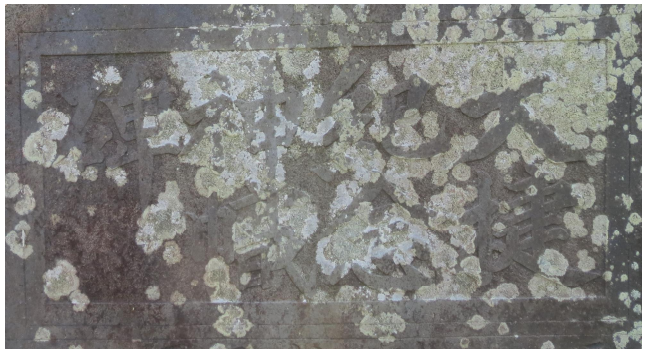
整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
入間〇六	大捷紀念神幟碑	発智庄平	発智庄平	発智庄平

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
富沢久助	一八九五・明治二八	春日町	春日神社	

一．はじめに

本石碑は、日清戦争の勝利を記念して春日神社の幟を新調したことを述べたもの。戦争の勝利を天皇と兵士達の忠勇によるとした上で、神明の加護があったからこそだとし、神への感謝の意をこめて、幟を作ったと言う。碑文は「天皇」の語が出てくるたびに改行し、「天皇」が行頭に来るようにしている。

〇写真１　石碑正面



○写真２　題額（篆書体）

○写真３　「碑記」部分（楷書体）

○写真４　石碑背面

○写真５　幟

二、翻刻並に訳注

■翻刻

（正面）

○題額

大捷紀念神幟碑

◎碑記

明治二十七年朝鮮國有内變清國出兵
偸盟慢我叡聖文武
天皇陛下赫然震怒乃興六師以問其罪
旭旗所向克捷相継陸無勍敵海無坚艦
一舉将衝北京清廷大懼遠派使臣引罪
請和於是馬関締約以成矣顧王師大捷
如斯振古所未曽有中外所未曽聞於戯
盛哉是雖
天皇陛下威德之所致軍人忠勇之所與
焉有力而未必無天地神明之加護也春
日神社郷之鎮守也頃者父老相謀新製
神幟以表報賽之意又書其由於石建諸
祠側鳴盛事於將来云
明治二十八年九月十九日
日本弘道會黒須支會長發智庄平
撰并書

＊異体字等

○所　所。　○國　國。　○坚　堅。　○致　致。　○須　須。　○撰　撰。

（背面）

◎題額

神幟
寄附
連名

（寄付者名　略）

川越町石工富沢久助

◆幟

春秋祭祀虔致誠敬
日月照臨徧蒙徳光

明治廿八年四月吉日
書爲　黒須氏子中
正四位勲三等巖谷修

落款　落款

■訳注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

（正面）

◎題額

大捷紀念神幟碑。

◎碑記

明治二十七年、朝鮮國有内變。
清國出兵、偸盟慢我。
叡聖文武天皇陛下　赫然震怒、乃興六師以問其罪。
旭旗所向、克捷相繼、陸無勍敵、海無堅艦。
一舉、將衝北京。
清廷大懼、遠派使臣、引罪請和。
於是、馬關締約以成矣。
顧、王師大捷如斯、振古所未曽有、中外所未曽聞。
於戲、盛哉。
是雖天皇陛下威德之所致、軍人忠勇之所與焉有力、
而未必無天地神明之加護也。
春日神社郷之鎮鎮守也。
頃者、父老相謀、新製神幟、以表報賽之意。
又書其由於石、建諸祠側、鳴盛事於將來云。
明治二十八年九月十九日、
日本弘道會黒須支會長發智庄平撰并書。

◆幟
春秋祭祀、虔致誠敬、
日月照臨、徧蒙德光。

明治廿八年四月吉日、
書爲黒須氏子中。
正四位勲三等巖谷修。

●訓訳

◎題額
大捷紀念神幟の碑。

◎碑記

明治二十七年、朝鮮國に内變有り。
清國兵を出し、盟を偸み我を慢る。
叡聖文武なる天皇陛下、赫然として震怒し、乃ち六師を興して以て其の罪を問ふ。
旭旗の向かふ所、克捷相ひ繼ぎ、陸に勍敵無く、海に堅艦無し。
一舉にして、將に北京を衝かんとす。
清廷大いに懼れ、遠く使臣を派して、罪を引きて和を請ふ。
是において、馬關の締約以て成れり。
顧ふに、王師大捷すること斯くの如きは、振古に未だ曽て有らざる所、中外に未だ曽て聞かざる所なり。
於戲、盛んなるかな。
是れ天皇陛下の威德の致す所、軍人の忠勇の與りて力有る所と雖も、
而も未だ必ずしも天地神明の加護無くんばあらざるなり。
春日神社は鄕の鎭守なり。
頃者、父老相ひ謀り、新たに神幟を製り、以て報賽の意を表さんとす。
又た其の由を石に書し、諸を祠側に建て、盛事を將來に鳴らさんとすと云ふ。
明治二十八年九月十九日、
日本弘道會黒須支會長發智庄平撰し、并せて書す。

◆幟
春秋の祭祀、虔に誠敬を致さば、
日月照臨し、徧く德光を蒙る。

明治廿八年四月吉日、
黒須氏子中のために書す。
正四位勲三等巖谷修。

●人物

○天皇陛下　明治天皇。名は睦仁（むつひと）。幼名祐宮（さちのみや）。孝明天皇の第二子。嘉永五（一八五二）年から明治四五（一九一二）年、在位は一八六七年から。
○發智庄平　元治元（一八六四）年から昭和十一（一九三六）年。発智家二十七代目当主。入間郡黒須村（現入間市）の名主繁田家に生まれ、明治十六（一八八三）年に十九歳で発智家に入り婿となって家を継ぐ。家業のかたわら、埼玉県師範学校高等師範科で学び、卒業後、黒須高等小学校の訓導兼校長に任じ教育にあたる。霞ヶ関青年道徳研究会や発智農会など社会人教育にも力を入れ、県内初の児童養護施設「埼玉育児院」を援助し院長もつとめた。昭和四（一九二九）年には、「霞ヶ関カンツリークラブ」を創設した。
○巖谷修　天保五（一八三四）年から明治三八（一九〇五）年。字は一六、号は呑澤山人他。家は代々、近江水口藩侍医。十六歳で江戸へ出て、医学を学び、帰藩後侍医となる。明治維新後は内閣書記官などをつとめ、元老院議員・貴族院議員と政治家としても活躍した。漢学・絵画などにもすぐれたが、書家としても第一級であった。近代児童文学の開祖である巖谷小波は、修の三男。

●注

○大捷　捷は勝。大勝利。
○明治二十七年　西暦一八九四年。
○朝鮮國有内變　東学の乱。同年五月、民族的な東学を中心とし、排日と減税を要求して勃発した大規模な農民反乱。
○偸盟　偸は、軽視する、あなどる。盟は、具体的には明治十八年に日清間で締結された天津条約を指すか。この条約で、日清両軍の朝鮮からの共同撤退や、今後の出兵に際しての相互通告などが取り決められた。東学の乱に対応するための清軍の出兵が、これに違反しているというのであろう。
○叡聖　理解力徳性が抜群に優れる。帝王の呼称。
○文武　学問と武術。
○赫然　怒るさま。
○六師　六軍。天子の軍隊。
○旭旗　旭日旗。朝日を模様化した旗。日本海軍の軍旗だが、ここは海軍にとどまらず、日本の軍旗をいうのだろう。
○克捷　敵に勝って勝ちを制すること。
○勍敵　強い敵。
○堅艦　熟語はないが、堅牢な軍艦だろう。清国には日本海軍を押しとどめられる海軍はなかったことを言うか。
○引罪　罪を認め引き受ける。
○馬關締約　下関条約。明治二十八年四月、伊藤博文首相全権と李鴻章全権との間で調印された。台湾・遼東半島などの割譲、賠償金の支払い、重慶・蘇州等の開市開港と租界での治外法権などが約された。
○王師　天子の軍隊。ここでは日本の天皇の軍隊。
○振古　振は、より。古より。
○中外　中国国内と外国。ここでは日本と外国。
○威德　威厳と恩徳。

○所與焉有力　関与して効力がある。
○天地神明　天地の神々。
○報賽　恩に報いるため財物を奉ること。
○盛事　盛大な事業、立派な事業。
○日本弘道會　明治期創設の教化団体。明治九（一八七六）年西村茂樹創設の修身学舎が前身。同二十年に日本弘道会と改称。忠孝・敬神・皇室尊重をうたい、教育勅語を奉じて儒教的道徳教育を主張した。各地に分会が設けられたが、発智庄平が主導した黒須支会は活発な活動を展開していた。

◆幟
○誠敬　まごころから慎み敬う。
○徳光　熟語はないが、光り輝く恩徳だろう。
○黒須氏子中　春日神社の現住所は入間市春日町だが、春日町を含む一帯はかつては黒須村だった。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【朝鮮内乱と日清の開戦】
明治二十七年、朝鮮王国で内乱が起こった。
清国はこれに兵を出した。これは出兵に際しては相互通告するという天津条約を無視するもので、締結国の我が国を侮り軽んじるものであった。
理解力と徳性に優れ、文武両道に通じておられたわが天皇陛下は、たいそうお怒りになった。そこで天子の軍隊を出動させて、清国の罪を問いただされた。

【皇軍の連戦連勝】
我が軍旗の向かうところ、連戦連勝で、陸地には日本陸軍の進軍をさえぎる強い敵はなく、海上には日本海軍を跳ね返せる堅牢な軍艦などなかった。
かくして一挙にして清国の都である北京に迫ったのである。

【清国の降伏と和平条約の締結】
清国の朝廷は大いに恐れ、遠く日本へ使者を派遣して、罪を認め和睦を請うた。
かくして下関条約が締結され、清国は罪を認めて多くの賠償を差し出し、日本の完全勝利が確定したのだった。

【皇軍大勝利とそれをもたらしたもの、神霊の加護】
省みるに、かくのごとく天子の軍隊が大勝利を収めたことは、古今未だかつて無かったことであり、日本の国内外で言っても誰も聞いたことがないほどのことであった。
ああ、なんとすばらしいことではないか。
こうした成功は、天皇陛下の威厳と恩徳によるものであり、軍人たちの忠義と勇気がそれに関わって効力をもたらしたものであるのだが、なんといっても日本の天地の神々によるご加護の賜物であることは間違いが無い。

【黒須鎮守春日神社への幟の奉納】
春日神社はわが黒須村の鎮守の神様である。
近頃、村の長老たちが相談し、新しく神社の幟を作成して神社に納め、恩徳に報いる気持ちを表現する奉納物としようと考えた。

【建碑の企て】
さらにまた、この間の経緯を文章化して石に彫り、石碑を神社の社の傍らに建てて、この盛事を将来にまで鳴り響かせようとしたのである。
【記事】
明治二十八年九月十九日、日本弘道会黒須支会長の発智庄平が撰文し、あわせて文字を書した。

◆幟
春秋の決まった祭祀において、敬虔にまごころから慎み敬うならば、
日月が照らすごとく神々は人々を照らしてくれ、光り輝く恩徳が人々をあまねく覆ってくれるであろう

明治二十八年四月吉日、
黒須氏子中のために書した。
正四位勲三等巖谷修。

三．資料

（一）「新編武蔵風土記稿」（文政十三（一八三〇）年）巻一六一　入間郡之六
◎黒須村：
○春日社
「當村の鎮守にして、例祭九月十九日、村内蓮華院持」
（二）「武蔵国郡村誌」（明治十五（一八八二）年）入間郡
◎黒須村：神社
○春日社
「村社々地東西二十一間南北二十七間面積六百十坪村の北にあり天津兒屋根命を祭る祭日九月十九日」

四．主な参考資料

①翻刻
・「入間市史調査報告書 第四集（入間市の社寺金石）」一九八八
②論文など
＊幟
・入間市教育委員会「入間市の幟」一九九五

以上

二〇二四年十二月　薄井俊二訳す